

草庵仏教

第111号
(発行日)
1999年9月1日
(発行所)
真宗大谷派 念佛寺
〒6638126 西宮市
小松北町1-2-3
電話・FAX (0798)
41-5346
(発行人)
土井紀明

《 聞法会ご案内 》

- * 同朋の会 (念佛寺)
8月は休み
.....
- * 聖典講座(浜屋仏壇店)
第1土曜日午後3時
- * 念仏座談会(念佛寺)
8月は休み

自己の境遇と因縁との関わりについて

一 人の世界と人間生活には、天災地変、戦争、貧困、病氣、家庭の中のいざこざなど、昔から悩みの種がいっぱい起こつてきます。

そうした困難に、それぞれが対処していくのですが、自分の力には限界があつて、ふりかかるといわれる「災難・不幸」を取り除くことはなかなかできません。その上、現在は安定した生活をしていても、いつどういふやつかいなきことが身辺に起こるかも知れないといふ不安を常にかかえているのが凡夫の状況です。

このような時に、よく人がたのみにするのは、神や仏や先祖霊などの目に見えぬ神秘的な力にすがつて、「御利益」やら「お恵み」やら「災難除け」を期待することであり、これは太古の昔から連続して続いている凡夫の行動様式です。こうした人間の期待に応じて、時代は変わり社会体制は変わろうとも、手を変え、品を変え、装いを変えていろいろな宗教(?)が現れてきました。

私たちは、そうした宗教によつて、御利益やお恵みをいただけると思いこんで、神仏や守護霊などに呪術や祈祷などを通して祈願してきました。

これは要するに宗教を「生活に役立つ」ようにするの、効果や効験を期待して宗教に入るのは宗教を功利的関

心でしか見ていないのです。だからもし効果がなかったら、離れるのです。そこには御利益を求めている自分自身は問題となつていません。

真実の宗教は、おかげをものとめ、タタリをおそれている「自己そのもの」にこそ、苦しみを引き起こす元があつて、それを克服するのであつて、自分自身を問題にしない宗教は真実の宗教とはいえないのです。

さて、平生は「こういう呪術や祈祷で不運を幸運に変えたり、災難を除去したりする」といふのは非科学的で信用できない」とか「あれは迷信だ」と思つていても、難儀なことや重なりますと、不安やまどいがおこつてきます。

そんな時に、「先祖供養をしていないから、不幸がかさなるのです。先祖供養を十分しなさい。そうすればきっと災厄はのぞかれてきます」といわれ、効能や体験談を聞かされたり、あるいは「題目を唱えなさい。そうすると悪い運命がよい運命に変わりますよ」といふ話を聞かされ、そのうな話を祈りや先祖供養の読経や唱題をやつてみようと思ふのは、よくある話です。

どうにもならない苦境に陥つて、人がワラをもすがること、気持でそれに飛び込むこと

もわからないではありません。あるいは「なにもおかげがなくて元々、損はない」といふことで軽い気持ちではじめめる場合も結構あると思います。やってみて効験がなければやめるか、あるいは別の宗教にうつつたりするので、そのようにして宗教をわたり歩いていく人もいます。念佛寺のご門徒で母親が末期ガンで悪くなつたとき、一時的に創価学会へはいった人がいました。しかし、効験が無くお母さんが亡くなられたら、また真宗に帰つてこられました。ようするに「効果さえあれば」といふ功利的な気持ちから一時的に入信した行為だったのです。

さて、新興宗教でよくいわれるのは、「病氣、貧窮、家庭不和などの大きな原因は、本人や先祖の過去の悪業が現れて現在の不幸となつています。だから過去の悪い悪業因縁を懺悔し、これを断ち切らねばならぬ。そのためには先祖の諸霊をまつり、心をこめて読経をしたり、題目を唱えて功德を積まねばならない。そのような懺悔滅罪の行を修めることによつて、悪因縁が断ち切れ、神仏の加護が恵まれる。災難不幸はなくなつていくのです」といふような話です。

こういう話をよく聴きますが、これは正しい道理でもなければ仏法でもありません。ないことの一つは、病氣にな

つたことや経済的困窮、家庭の不和などを、当人や先祖の過去の悪業(罪悪)の結果とのみ見ることです。

たしかに災厄や不幸をもたらした原因の一つとして、自分の過去の悪い行いが関係していることはもちろんあります。たとえば、家庭をかえりみず多額の金を遊興費に使つたことによつて、夫婦仲が悪くなり、それが子供にも影響して、子供が非行に走るようになり、家庭が崩壊したとか、あるいは詐欺行為をして金を集めて大もうけをしたが、結局は社会的信用を失い、困窮する、けれどもだれも援助の手をさしたのべでなく、たしかにその人の過去の愚かな行いが原因で現在のいじめな境遇に陥つているといえましよう。しかし、人間の「災難・不幸」の因縁はほかにもいろいろあり、それらを無視してその個人過去の悪業だけに帰するのは間違いです。

たとえば、経済的困窮についていえば、今日の日本のように、真面目に働いてきても会社の都合でリストラされるとか、会社幹部の経営見通しの甘さによつて会社が倒産して失業するとか、世界的不況の影響をモロにうけるとか、様々な因縁によつて、その人の経済的な困難があるのです。

あるいは、道を横断して、半身不随の大けがをする、というように災難におうた時、

災難にあつた本人の過去の悪い因縁のせいとか先祖のせいであるとか決めつけるのは明らかに間違いです。交通事故の原因はいろいろありますが、本人の不注意散漫も一つの原因ではありましよう。また、当然事故を起こした相手のドライバーの不注意があります。車に欠陥がある場合もあり、社会全体が過剰な車による危険度の高い車社会という面も絡んできます。こうした因縁によつて事故が起こつたと見るのが道理であつて、ケガをした本人の過去の悪業や先祖の悪い因縁などに結びつけて、その「悪因縁を断ち切らねば不幸はなくなるならぬ」などというの、道理にはずれた言草です。いわんや見たことでもない「何代か前の先祖の霊が成仏してないから、それが原因で不幸をまねている」などというの、全くのあやまりです。それは正しい仏教の教えではありません。

人の生活状況（環境）は、さまざま要因（諸縁）が複雑にからみ合つて起こつて行つて、本人の過去の行いの報いによつてそうなるのだと決めつけることは明らかに間違つています。

なおこのことに関して、更に大きなあやまつた考えがあります。たとえば、生まれつきの身体障害者の人などを「あの人は過去の行いが悪かつたからだ」という場合が時にあります。

ですが、これは当然不合理な考えです。肉体的な障害を本人の過去の悪業の結果だとか、先祖の悪業の現れだとかいうのは、大きな間違いです。また、ひどい例では、たまたま同和地区に生まれた人を、（「あの人は過去の業が悪かつたから、ああいうところへ生まれたのだ」と言うのは、生きたはなだしい邪見であり、差別と偏見以外の何ものでもありません。

要するに、経済面、環境面、身体面などでの、自分の生活環境が、どのようにして現在の状況になつたのかということは、いわば肉体的な面を含めて今の自分の環境状態は、さまざま条件によつてそうなつて居るので、それを仏教では縁起ともいい、因縁ともいいます。

その縁（条件）のなかに、その人個人の行いの善し悪しに関係してくる場合ももちろんあります。しかし無い場合もたくさんあります。例えば、今度の地震で家がつぶれたというの、個人の行いの善し悪しに直接関係がありません。自然現象が直接の原因であります。

ですから、自他の困難な状況を見て、それをその人自身から見て、先祖の悪業だと決めつけたり、先祖が成仏してないからとかいうのは誤りです。この回は紙面の都合上触れることが出来ませんが、個人の外的な

生活状況については、それをどう理解し、どう受け止め、どう消化して、さらにどう歩むかというその人自身の主体（精神）のあり方に直接関係するものなのです。
（文・土井）

松並松五郎さんの法語

○悪い私と思わしてもらおう事が、ごんげだと思つて
いるが、悪い私と思つたから悪い私であつたので
は無い。思うも思はざるも、元々悪い私である。
こんな者のごんげは何になる。人も私も、私も人
も、念仏聞く以外に、ごんげ、歡喜もある様に思
つて居るが、ごんげした後から、下からまた怒つ
て居る。

○私の心は変わりずめである。変わったら変わった
まま、善い心の出てる筈がない。しかしそれで
仏様の御見抜き通りやそうです。

○どんな尊い仏像でも、さ程に有難いとは思えない！
お念仏に勝る仏様はござらぬ。この口に現れ給う
南無阿弥陀仏こそ、活きたお喚び声にてまします。
南無阿弥陀仏

○人は口に称名念仏して居る時だけを念仏と思つて
いる。夜昼、私にふりかえる、ふりかけられる、
御心の現れが口にもれて、南無阿弥陀仏と飛んで
くるお念仏と、よう頂かぬ。くいちぎる。如来様
のお念力、喚び声、さけび声が、今私を貫き徹し
て、ひびき出給うひびきが、口耳に聞えて下さ
る。お念仏をなぜになぜにくいちぎる。

○偉くなるのでなく、仏様にだまされて念仏の阿呆
になるのです。南無阿弥陀仏

○大抵のお方は、信心の枝葉を別々に動かしてござ
る。信心とお念仏とが別々になつて居る。「必ず
助ける」のお誓いの根元をゆすれば、根元が動け
ば、信心の枝も、お念仏の葉も動く。根元は「助
ける」それが念仏。念称は一つであります。

真宗聖典講座

慈悲に聖道・浄土のかわりめあり。聖道の慈悲
というは、ものをあわれみ、かなしみ、はぐく
むなり。しかれども、おもうがごとくたすけと
ぐるごとく、きわめてありがたし。浄土の慈悲と
いうは、念仏して、いそぎ仏になりて、大慈大
悲心をもつて、おもうがごとく衆生を利益する
をいうべきなり。今生に、いかに、いと申し不
便とおもうとも、存知のごとくたすけがたけれ
ば、この慈悲始終なし。しかれば、念仏もうす
のみぞ、すえとおりの大慈悲心にてそろう
べきと云々
(歎異抄第四章)

(第四章第一講)

現代語訳——(慈悲ということについて、聖道門
ですすめられているような慈悲と、浄土門で語る慈悲と
ではちがいがあります。慈悲ということとは、苦し
悩む人をあわれにおもひ、いと申し、守り育てる
ことですが、聖道の慈悲というものは、自分の力で、
人々を苦しみから救いあげて、安らかなしあわせを
与えようとすることをいいます。しかし凡夫がどん
なにつとめても、思い通りに人々を助けとげること
は至難のことです。

浄土門で慈悲を語る場合は、自分がまず本願を信
じ念仏して、すみやかに仏のさとりを得させていた
だいて、その上で大慈大悲をおこして、思いのまま
に一切の衆生を救い、真実の利益を与えることをい
うべきです。

この世に凡夫として生きてあるかぎり、どんなに
気の毒だと思つても、思い通りに助けることはでき
ないから、わが力によつて、この世で人々を救おう
と願う慈悲は中途半端なものでしかありません。そ
ういうわけですから、本願を信じ念仏を申すことだ
けが、ほんとうに徹底した大慈悲心だといえましょ
う、と仰せられました。

私たち凡夫は知らず知らず、また疑うことなく、
自分と自分以外のものを分けて、あらゆることを

念佛寺秋季彼岸会

九月二十一日(水)

午後二時始まり

*どなたでも気軽にお参り下さい。

考えています。自分と他者とを分けて、その上で愛
したり憎んだりして居ます。自分にとつて都合のよ
い人を好きになり、都合の悪い人を嫌います。

ところが仏の智慧は、自と他を一体と認識する智
慧であり、(我というものもなければ我がものという
ものも本来はない、いわば世界が自己の内容である)
という認識であります。それは、生きとし生けるも
のの外に自己はなく、生きとし生けるもの一人ひと
りを自己自身のごとくに感じとる智慧であります。
ですから、人の苦しみを我が苦しみ感じ、人の悲し
みを我が悲しみと感じる浄らかな大慈大悲がおのず
と伴います。こうした広大無辺なる智慧と慈悲のは
たらきが仏の本質です。

聖道門の修行者たちは、こうした仏の智慧と慈悲
を、自他ともに実現するために、道を求め、永く厳
しい実践を重ねていくのであります。

さて、慈悲とは、生きとし生けるものをあわれみ、
いつくしむ心ですが、すべてのものに樂を与えよう
とする心を慈といい、苦しみを取り除こうとする心
を悲といいます。

要するに慈悲とは、人びとの苦悩に同感し、人の
痛みを共感しながら、苦を除き安樂を与えて人びと
のしあわせを実現してゆこうとする心をいいます。

インドの聖者天親菩薩は智慧と慈悲の内容を
「一には智慧門によりて自樂を求めず。我心の自身
に貪着することを遠離するがゆゑなり。

二には慈悲門によりて一切衆生の苦を抜く。衆生を
安んずることなき心を遠離するがゆゑなり。
三には方便門によりて一切衆生を憐愍する心なり。
自身を供養し恭敬する心を遠離するがゆゑなり」
(浄土論)

と申されています。この言葉は

「第一に、明かな無我の智慧によつて、自分だけの樂を求めようとせず、わが身を樂にしようと計らう利己心を離れるのである。」

第二に、清らかな慈悲の心を起こして、すべてのものの憂苦を取り除いて、まことの安らぎを与えたいという心、そのような慈悲心が無い無慈悲な心を離れるのである。

第三に、智慧と慈悲の心から、すべてのものに善きてだてを施し、自分の善い行いによつて尊敬されたいとか利益を得たいとかいう野心から遠ざかるのである。

という意味になるでしょう。何という純粹で気高い慈悲の精神でしょう。これが菩薩の目指す慈悲行であります。聖道の慈悲というのは、このような純粹な菩薩精神を身につけ、慈悲を實踐することであり、精神にも物質的にも、人々の憂苦を除き、ついに涅槃の安らぎにいたらしめていこうという菩薩行、これが聖道の慈悲であります。まさに「聖道の慈悲というは、ものをあわれみ、かなしみ、はぐくむなり」です。

私もこのような道を歩もうとしている二・三の人にお会いしたことがあります。

親鸞聖人当時にも聖道門の慈悲行を真剣に實踐しようとした高僧たちがいます。その中の一人に大悲菩薩とたたえられた忍性律師(一一二七〜一三〇三)という方がおられます。忍性は戒律を厳しく守って清らかな生活をしつつ、困窮している多くの人々のために慈悲行を強力に押し進めたお方です。

《忍性(一一二七〜一三〇三)は大和、現在の奈良県に生まれた。十六才で母と死別し、額安寺で出家得度。二十四才の時、叡尊から戒律を受ける。母の十七回忌の時に、額安寺で千人の貧者に食を施す。奈良坂に日本最古の救ライ施設「北山十八間戸」を作る。重症の患者を早朝背負って奈良の街に連れていき、そこで乞食して喜捨を受けるようにさせ、夕方にはまた丘の上の施設まで背負って帰った。三十六才の時、常陸の清涼院に行き、十年間布教、その後鎌倉に出て、極樂寺の開山となる。四十八才の時、貧者三千人に食を施す。得度させたもの二七四〇人。伽藍の修復八十三。仏塔建立二十。大藏經を納める所十四。橋をかけること一八九。道路修復七十一。井戸を掘ること三十三。悲田院(病院)五、などを作る。施した布は三万三千領。二十年間に五七二五〇人を療養させた。馬病舎(一二九八年)も造る。》

この時代にこれほどの慈善行為をした人は、ヨーロッパにも例がないと、インド哲学者中村元博士は言っています。

このような慈善行為や福祉活動によつて、「もの(人)をあわれみ、かなしみ、はぐくんで人々を救い、さらに涅槃の安らぎにまで導いていこうとするのを聖道の慈悲といえます。なお聖道の慈悲は、単なる福祉にとどまらず、一切衆生を涅槃の幸せにまでいたらしめようという高い理想を持っています。

ただともかくも、人の困窮に同情し手をさしのべ、人の悲惨さを悲しんで何とかしてあげたいと思ひ立ち、極貧の人や孤児や病人などを養育する行為は尊い慈悲行為であります。今日の社会において、ボランティア活動とか福祉的な奉仕活動などによって人々を救うていこうとするのは昔も今も、世の中から大變尊ばれ、また期待されております。それは聖道の慈悲に連なるものでありましょう。

こうした聖道の慈悲にたいして、親鸞聖人は、(個人)の為す慈悲行では、人々をおもむがごとくたすけとげることができない」と仰せられるのありましよう。それは、どこまでもご自分の身に引き当てて仰せられるのです。決して聖道の慈悲行為を否定されているのでもなければ価値薄き行為であるといわれるのでもありません。

聖人は、聖道の慈悲の尊さを充分に尊重された上で、「わたしはできるであろうか」と自分に問うた時、「人として当然なすべき尊いことであると思つても、私の起こす慈悲心や同情心では、思いどおりに人々を救うことも出来ねば、たとえ少しでも出来たとしても、これで人を救い得たといえるような未通つた救いを与えることはできない」と、聖人はもうさされているのではないでしょう。

何時の時代でも、理想的なことはいくらでも考えることも言うこともできます。しかし、それを私に實際にやろうとすると、手力セ足力セがあつて、「思うようにできるものではない」という嘆きに帰するものが凡夫の私の姿であります。

手力セ足力セすなわち外からの束縛と内からの束縛とによつて、現実の生活は、理想とはほど遠き生き方しかできないのが私の有様です。外からの束縛とは何でしょうか。それは例えば金銭の問題です。人を救うのにはたいの場合お金

も時間もいりません。然るに家庭を持つている者として、どれだけ人に施しが出来ましょうか。家族を養うのにせい一杯であります。独身でお金にゆとりがあるならまだしも、限られた収入で家族の生計を立てようとするれば、他者のために使えるお金は限られてしまいます。また他者を援助する時間のゆとりがなかなかもてません。かわいそうな人や気の毒な人が沢山いることも知っており、そういう人を援助することの大事さは重々知っています。実際に出来ることは、まことにささやかな援助しかできないのが現実です。

さらに内なる束縛があります。それは、他者の困難を知つて、それを真剣に助けてあげたいというあふれるような慈悲心や勇氣や実行が自分の中に起こらないという凡夫の浅ましき。人の苦しみを他人事にしか見ない冷たさ、そういう利己的な煩惱に縛られているのがいつわらざる私どもの姿ではないでしょうか。

こうした内外の束縛に縛られているのは、宿業の身ゆえの私の現実です。この私に聖道の慈悲はなかなかの縁をいただいて多少はできても、慈悲行とも言えないほどのささやかなことしかできないお粗末な我が身であります。

親鸞聖人は「こうしか生きられない宿業の私」に随分悩まれたのではないでしょう。そして、**にもかかわらず他者を限りなく救うていくことのできる道、徹底して人々を救うていける道はないのである**うか。その問題を仏法に問うていつたとき、そこに見出されたのが浄土の慈悲でありました。(文・土井)

親鸞聖人御旧跡参拝奉仕団募集

*親鸞聖人の御旧跡の各所を参拝することを通して親鸞聖人のご生涯とその教えに学びます。

期間 十月十二日から十四日までの二泊三日
宿泊 東本願寺内同朋会館
費用 一九三〇〇円(期間中の全費用)
締め切り 九月二十四日
集合場所 JR尼崎駅

*申し込みは念佛寺へ。一人でも参加出来ます。本願寺に泊まつて、親鸞聖人の聖跡を訪ねませんか。

